

風光なしと雖も、雄大未知の山川を跋渉す、亦愉快ならずとせず。

道路は西北を指し、市の西北端なる紅廟嘴より、岡脈忽ち北に去り、獨り南山の支脈のみ、西方約二里餘の處に在りて前路に迫り、其の北側には點々たる人家、柳樹の間に隱現するを認めたり。小地シヤオヂーモ勿僕プーを経て大地ターヂーモ勿僕プーに晝食し、頭屯河の西端に一河を渡る、河は南々西より北々東に流れ、幅約一千米突弱、淺水三條に岐れて兩岸絕壁を爲す。午後三時四十分行程約十二里昌吉チヤンチに投ず。此地は人家約五百を有し、昌吉縣衙門あり、歩隊、馬隊各一哨を駐屯せしむ。烏魯木齊住民の要する野菜類は多く此の地より供給す。途上瑪納斯マナスより烏魯木齊に運搬する駱駝隊數群に遭遇せしが皆麵粉を馱せり。又鴨鶴の群飛するを見たりき。聞く當地方には頭部膨脹して痛苦甚しき一種の風土病ありと。

一種の風土病

昌吉

少許の水田

翌二十五日前日と略々同じき行程を以て呼圖壁フトゥビに着す。景化縣丞チンホワの衙門あり、途上融雪の爲め泥濘轍を沒し車行迅速ならず。昌吉城外始めて少許の水田を見つゝ、依然西北を指して園城子ユンシユコウに到る。沿道人家點在只榆樹溝ユシユコウ以西、三十里墩の西方のみ兩側開濶なるも他は特に其の東北方に多く榆柳生ひ茂り、甚しきは一切